

令和八年度思考型特別選考試験

試験問題

試験Ⅱ

受験上の注意

- 一、答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 二、問題は二ページあります。
- 三、試験時間は五十分です。

三重中学校

受験番号

〔一〕 日本語には「手」や「足」を用いた表現がたくさんあります。次の上段には表現、下段には意味が書かれています。空欄になつているところを補いなさい。

・手がつけられない

・手が

自分の能力ではとにかかることができない。

・手が入る

加筆・訂正がなされる。捜査や逮捕に警察官などが入ってくる。

・手が

物事をてきばきと処理する。すぐ暴力をふるう。

・手をわずらわす

・手に乗る

相手の計略に引っかかる。

・手につかない

・手を

関係を断つ。

・手を抜く

・手を

うまく処理できなくて困る。てこずる。もてあます。

・足が地に

嬉しくて、興奮して落ち着かない。

・足がはやい

食物などが 。走るのがはやい。

・足を

悪い仲間から離れる。

・足をすくう

・足を

予算または収入を超える金額を使う。赤字にする。

・足をとられる

足もとをすくわれる。酒に酔って歩けなくなる。

・足を

今来ているところよりさらに遠くまで行く。くつろぐ。

・足を運ぶ

あることのためにわざわざ出向く。

・足を引っ張る

・足が棒になる

〔二〕 「目」を用いた表現と意味をできるだけたくさん書きなさい。

〔三〕 次の物語から私たちは何を学ぶことができますか。わかりやすく説明しなさい。

昔々、一人の木こりが材木屋に仕事をもらいに行った。申し分のない条件だったので、木こりは仕事を引き受けることにした。男はやる気満々で森に入った。その日は一日で十八本の木を切り倒した。「よくやった！ この調子で頼むぞ！」。親方の言葉に励まされた男は、明日はもっと頑張ろうと誓って早めに床に入った。

次の日、男は誰よりも早く起き、森に向かった。ところが、その日は努力もむなしく十五本が精一杯だった。「疲れているに違いない」。そう考えた木こりは、日暮れとともに寢床に入った。

夜明けとともに目を覚ました木こりは「今日は何としても十八本の記録を超えるぞ」と自分を奮い立たせて床を出た。ところが、その日は十八本どころかその半分も切り倒せなかった。次の日は七本、そのまた次の日は五本、そして最後には夕方になっても二本目の木と格闘していた。

何と言われるだろうとびくびくしながらも、木こりは親方に正直に報告した。「それでも力のかぎりやっています」。親方は彼にこう尋ねた。「最後に斧を研いだのはいつだ？」男は答えた。「斧を研ぐ？ 研いでいる時間はありませんでした。何せ木を切るのに精一杯でしたから」

（『寓話セラピー 目からウロコの51話』より）

問題は以上です。

